天界

第百七十八號（第十六卷）　（昭和十一年）二月號

美しき哉!! 二月の空

（卷　頭）

毎年，新しい歳があけてまもなく，暦日も二月に近づくと，夜の空を飾る星の世界には，青赤黄白さまざまの大星小星が燦然と輝やいて，吾々の眼を奪はんとするばかりに美しい．殊に，我が國の冬の大空は，比較的に良く澄み，ひろく晴れわたつて，宇宙の奥までも，遠慮なく見せてくれるのが嬉しい．歐米の方面では，秋や冬の空が一帶に曇り勝ちで，長い夜間は，誰でも唯，屋内や室内の歡樂に耽るより仕方のない狀態であるのに引きかへ，吾々東洋の一角に生活するものが，多少の寒さに堪えさへすれば，全天空の最も美々しい絶景を此の夜々の頭上に樂しむことが出來る特權を，誇らしく思はざるを得ない．

「星を知るやうになると，人は夜の暗い道を獨り歩くのが恐ろしく無くなる」と多くの經驗者は言ふ．しかし，尙ほ此の上に，吾々は言ふ：

『星を知る者は，寒さに堪えて，むしろ之れを樂しむやうになる』

之れも亦，星の功德，或は天文の功德と言つて良かろう．

夏の空に比べて，冬の空が如何に優れて美しいことよ！　南北につらなる天の河も，夏には夏の特別な景觀はあるが，それにも優して，冬の天の河はペルセウスから馭者，双子，オリオンを越えて，アルゴ船のあたりまで，まことに筆にも口にも及び難き色彩と光澤との交錯ではないか!!　只シリウスの巨光一つに眼を据えて，其のまたゝきに見入るだけでも，實に人の世を超越した千金の價はある．自分は今までにも，又，たびたび，冬の夜の觀測室の窓の隙き間から，ゆるやかに（しかし，幅深く）またたく多彩のカペラ星に長い時間見入つて，獨り此の宇宙のささやきに溶け入つた經驗を持つ．「三

つ星」のオリオン星座よ！　こゝにも吾々を何時までも飽きさせない味と美とがある．テ星を包む大星霧のあたり，肉眼者にも，望遠鏡の持ち主にも，無限の樂園であるが，少しく北へ移つて，ラムダ星あたりの微星の小團も亦，吾々の眼を離させない力はある．

人の世の文化が進み，日夜，吾々の交渉を持つ世界が廣く大きくなつたセイか？——とにかく，近代の吾人は日頃見聞するものに對して實に不注意になつて來つゝある．昔しの人は，さゝやかなるプレヤデスの微星群にも無限の感懷をもつて，之れを歌に詩に賞し，愛戀の情をさへ送つた．近代人は，年が年中，「此の世」的なざわめきの塵の中にまみれて，其れ以外の廣い天地を知らず，せつかくの星も月も，之れを宇宙以外の宇宙として捨てて顧みない態度が多い．不マジメと言はうか，冒瀆といはうか．

一言，南洋に人々に寄せる．臺灣，或はフイリピン，又は其れを更に南へ越えて，南半球の濠州やブラジルの人々にも，二月の空はやはりスリルとエキサイトメントの交響樂であることを自分は疑はない．オリオン座は赤道上に横はるかぎり，南北兩世界の共有物であるが，大犬座から，アルゴ船，それから十字架，センタウル座に至れば，之れ等は完全に南洋のものである．北半球の者にとつて唯あやしくも賴りないかのエリダン河の其の神祕的な行く先は，それは南半球の人のみが知る．巨星カノプスも，吾々に取つては時々見えたり見えなかつたりのものであるが，南の人々は此のカノプスとシリウスと二大超巨星が此の二月の炎熱の空に對立する姿を獨占することが出來るわけである．

南十字架とセンタウル座のアベ兩星は，南の星々の中でも，最も古典的な天象であるが，此等の星の瞥見は臺灣でもフイリピンでも經驗し得る．自分は昨冬，臺灣のアリ山の頂上から，日出前の東南の低空に之れ等を見て，獨り宇宙人の喜び樂しみにひたつたことを覺えてゐる．（山本）

來る二月14日，英國王立天文學會は木村榮博士に金牌を贈る．